

「史料 リスボン大地震 その一」

ジョアキム・J・モレイラ・デ・メンドンサ著 永治日出雄訳

『世界地震通史―リスボン大地震』 (第二部)

解題 『世界地震通史―リスボン大地震』 一

ジョアキム・J・モレイラ・デ・メンドンサ著

『世界地震通史―リスボン大地震』(第二部) 四

【解題】 『世界地震通史―リスボン大地震』

リスボン大地震に関する主要な文献として筆頭に挙げられる『世界地震通史―リスボン大地震』*Historia Universal dos Terremotos, que tem havido no Mundo* は地震発生三年後、一七五八年にリスボンで公刊された。原典の表紙に誌された本来の書名とその試訳を左記に掲げる。

JOACHIM JOSEPH MOREIRA DE MENDONÇA, HISTORIA UNIVERSAL DOS TERREMOTOS, QUE TEM HAVIDO NO MUNDO, de que ha noticia, desde a sua creação até o seculo presente. Com huma NARRAÇÃO INDIVIDUAL Do Terremoto do primeiro de Novembro de 1755. e noticia verdadeira dos seus effeitos em Lisboa, todo Portugal, Algarve, e mais partes da Europa, Africa, e America, aonde se estendeu : E huma DISSERTAÇÃO AO PHISICA sobre as causas geraes dos Terremotos, seus effeitos, differenças, e Porognosticos ; e as particulares do ultimo, Lisboa, 1758.

- 2 -

ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・デ・メンドンサ著『万物の創造から今次の世紀に至る世界地震通史―とくにリスボン、ポルトガル全土、アルガルヴェ、およびヨーロッパ、アフリカ、アメリカの多数の地域を震撼した一七五五年十一月一日の地震に関する個別の記録、ならびに地震の原因、結果、差異、予測に関する自然学的論究―』リスボン、一七六八年。

このように長大な書名であるため、本稿では便宜上『世界地震通史―リスボン大地震』または『世界地震通史』の略称を用いる。著者はポルトガル古文書館の史官ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・デ・メンドンサである。彼はみずから大地震の艱苦を体験し、王都壊滅のさなかサン・ジョルジェ城において重要文書の保全に献身した。全巻六百項、三百頁の同書には王権・教権による検閲認可が付せられている。著者自身の序言に続いて三つの部門、すなわち世界における地震の歴史、ついでリスボン大地震の諸相、最後には地震に関する古今の学説が論じられる。ここに邦訳を試みたのは、同書の中核をなす第二の部門、いわば第二部の全文、第四七二項から第六四一項までであって、リスボンにおける大地震の

経緯、ポルトガル各地の状況、アフリカなど国外への波及、一七五七年秋までの余震の記録にあたる。

リスボン大地震に関する多面的研究において先駆的な役割を果たしたT・D・ケンドリックは、『世界地震通史』全巻をもっとも優れた同時代の証言、従来のあらゆる地震研究を凌駕する作品と称讃した。しかし、この分野における多くの書物や論文も、モレイラ・デ・メンドンサの労作に関して、地震発生を告げる第四七三項など僅かな部分を紹介するに止まっている。

『世界地震通史』の論述を読解するためには、十八世紀ポルトガル語への習熟と地震学の成果への通暁はもとより、学芸百般にわたる深い素養が必要と痛感される。おそらくこうした事由もあって英訳などヨーロッパ語系の翻訳も見当たらず、残念ながら邦訳もなされていない。すべての要件において非力な筆者が、敢えてここに試訳を披瀝し、諸賢の叱正を仰ぐ所以である。

(永治日出雄)

モレイラ・デ・メンドンサ著

『世界地震通史―リスボン大地震』（第二部）

リスボン、一七五八年刊

地震の歴史 一七五五年十一月一日

【第四七二項】 この年十一月に人類が体験した地震は、規模の大きさによって後世のあらゆる世紀に想起されるであろう。なぜなら、その影響は遺憾にもきわめて多くの地域に及び、アジアのみが免れたからである。甚大な被害を蒙った地域の第一はポルトガル王国、とくに国王陛下の王宮を擁し、殷富で人口稠密な都市リスボンである。最初にこの都会における大地震の結果を報告し、さらには王国の各地や連関する諸地域についてその影響を叙述したい。

【第四七三項】 十一月一日、月曆二八日、大気は静穏で、雲はなく快晴。十月から温暖な数日が続き、秋としては多少暑さを感じた。気圧計二七インチ七ライン、レオミュール温度計一四グラオ（訳注*）、北東の微風。午前九時半をすぎ過ぎた頃、大地が揺れ始めた。その震動は地底から地面へ突き上げ、衝撃を増しながら、北から南へ揺さぶるように続いた。これに伴って建物の被害が生じ、数分のうちに倒壊と壊滅が始まり、大地の激烈な震動とその持続に人々は抵抗できなかつた。第二の震動は一層規則的に七分か八分続き、短い中断を挟んで二度の地震が起つた。あたかも遠くで雷が鳴るときのように、地下の雷鳴ともいうべき轟きが、この時間に終始聞えた。猛烈な速度で走る馬車のように多くの人々は思った。まさしく大地から噴出する蒸気によって、太陽の光が多少とも暗くなり、そこに含まれる硫黄の成分から臭気が発散するように感じられた。大地のあちこちに幅広くはないが、延々たる亀裂が認められた。建物の壊滅によって発生した粉塵が王都の一带を濃い霧で覆い、あらゆる生きものを窒息させた。

* 気圧計二七インチ七ライン、レオミュール温度計一四グラオは気圧計

約二三八ヘクトパスカル、温度計摂氏一七・五度に相当する。

【第四七四項】 こうした大地の揺れによって海水が背進し、岸边では初めて見る海底も露出した。また、高潮が屹立した丘陵をも洗い、尽きざる震動が沿岸のあらゆる民族へ影響を及ぼした。氾濫は大きなもの三度、小さなもの数度にわたり、多数の建物と水辺の多くの住民を破滅させた。

【第四七五項】 このような光景が悲痛な記憶を私に甦えらせる。多くの悲惨な事実が念頭に浮かび、それらの膨大さ、多様さ、深刻さは仔細に語るのを私に躊躇させる。だが、災厄の一端を話すだけでも、巨大な全貌を知る手掛かりになるかもしれない。

【第四七六項】 おりしも万聖節の祭日として盛儀が予定され、その時刻にはあまたの人々が教会へ参集し、聖職者の説教に恭しく聴き入るか、当日の式典を待ち受けていた。同じ目的で寺院を目指したり、用務を果たすため、道を急ぐ人々もかなり見られた。王都の住民の大半は自宅にいて、人によってはまだ床を離れない。地震に気づくや、すべてが脅威、混乱、無秩序となった。

【第四七七項】 ある人たちは屋内で茫然として地を踏むことも、戸を叩くこともできず、他の人たちは街路に跳び出して、障壁の瓦解によって死んだ。街路から教会へ避難する者もあり、降りかかる危険を避けるため教会から逃れる者もいた。住居の倒壊によって多数が石材の下敷となって絶命し、瓦礫に埋まり、救助を求めて泣き叫ぶ者もあった。

【第四七八項】 破壊された多くの寺院、階梯、穹窿、障壁が群衆の頭上に落下し、逃げ惑う彼らは神の慈悲を求めた。そうした叫びは聖母マリアの加護を願ってもなされる。同じ叫喚は王都のあらゆる街路や地点、近郊のさまざまな地区で聞かれた。地震の脅威、建物倒壊の轟音、死への恐怖、男衆の喚き、女子供の泣き声が異常な喧噪と錯乱を惹き起し、全般的な恐慌によって危機に対応できぬ状況となった。

【第四七九項】 こうした怖るべき騒擾のなかで愛だけが滅びなかった。父母は子から引き離され、子は生みの親を見失う。恋人たちはたがいに探し求めた。なにびとも財貨を頼りにできず、どうにか生き残ろうと、魂の救済だけを願った。

【第四八〇項】 多くの死者を調べたが、禍因はさまざまであった。ある人たちは安全な家屋から去ったり、他家の障壁の下に生き埋めとなった。ほかの人たちは目を天に向け、跪拝したまま建物の石材で絶命した。こなたでは救われた母親が死せる子を抱き、こなたでは息絶えた母親に抱かれる子が救助された。落下する石から子どもを両腕で護った人もある。カルメル会修道士と思われる人物が、進退極まる高窓に残され、遠方にいる聖職者に赦免を願って、火焰で焼かれるまで律儀に待機した。これこそ神が下された畏怖すべき審判の顛末である。

【第四八一項】 障壁の大きな形骸の下で煉瓦を集め、坑道を造って脱出した修道女もいる。身に帯びた衣服が瓦礫に絡まり、身ひとつで抜け出した人もいる。奇蹟的なまでに俊敏な対応である。寝たきりの患者や瓦礫による重傷者をも含め、いかに多くの人々が医者も医薬もなしに幾日で気力を取り戻したことが。これらこそ神慮による奇蹟にほかならぬ。

【第四八二項】 家屋を喪失した人たちが多数テージョの河畔へのがれ、震えながら荒墟を仰いでいた。突如そこへ怒濤のように上げ潮が押し寄せ、リスボンのみならず、ニレガ（訳注*）離れたリオ河口の都市まで被害を及ぼした。海流は従来の限界を超えて多数の建物を水没させ、サン・パウロ教会教区に氾濫したのである。どの水辺でも高潮は激しさを増し、新たな危険が王都と近郊に拡がって、全土が海に吞まれるとの噂が飛び交った。

* 時代によって異なるが、多くの場合レガは六六〇〇メートルとされる。

【第四八三項】 度重なる危険に動揺した人々は、狂気のように絶え間なく叫びながら、田野を動きまわった。画像を手にして、祈祷を唱えると、多くの者が見做って震える声を張り上げる。他の者は黙り込み、放心したように歩いた。

【第四八四項】 修行の場である僧院の廢墟を修道女たちは無念にも離れ、頼れる縁者や避難できる田野をそれぞれに捜した。引き裂かれたキリスト教徒の妻が、泣き叫びながらひとり田野をさまよう光景は、もつとも哀切な絵図である。若干の人々は破壊を免れた修道院の鐘楼に避難し、神の慈悲を待ち望んだ。

【第四八五項】 最初の地震のあとすぐにルリサル・マルケズ宮殿、サン・ドミンゴ教会、城皆会堂などから火の手が昇り始め、建物の灼熱と火焰が材木に移

った。かくして災厄は倍加し、惨事が一層深刻となった。血に塗れた人も虚弱な人も多くは荒墟から逃れたが、重病で寝たきりの患者は、そのように脱出できなかった。瓦礫によってあまたの生きものも四肢を砕かれたり、板挟みとなり、逃れようと喧噪に鳴き続ける。これらすべてが炎に焼き尽くされた。語りえないほど凄惨なのである！

【第四八六項】 震動は数時間毎に繰り返し、激しさは減じたものの、同じような脅威を感じさせた。かくも激烈な地震によって大地が割れるのではないかと人々は恐れた。城砦へ火の手が迫るや、流言が飛び交った。城に蔵される火薬に引火し、王都全域を脅かして、地震を免れた人をも焼死させると言うのである。怯えた心は理性的に思考できず、震えた呼吸と慌てた歩調で王都から一レガ、二レガ、三レガ離れた地点へと連夜歩いた。

【第四八七項】 こうした流言は幾人かの悪者に帰せられる。豪華な邸宅で掠奪できるよう、無人の都にするようを企てたのである。彼らの強欲から広汎な荒廃が惹き起された。なぜなら、若干の地域では火災を阻止できたのに、被災のないものさえ、すべて見棄てたからである。邸宅が焼け崩れても、命だけは護ろうと、富裕な王都の住民は多く思案した。

【第四八八項】 沢山の修道女と聖職者が荒墟のなかを巡回し、ときには礼拝の式服ですべての死せる者生きる者の赦免を行い、神と聖母の慈悲を哀願した。他の地域では罪人が悔悛と贖罪に導かれる。多くの一般人も教えを説いた。婦人や田舎者さえ説教師に変身したのである。だれもが神の怒りを恐れ、王都とわが命の最終的な破局に怯えた。神への畏敬を説く一言一句も無益ではなかった。なぜなら、多くの罪を省みて、素直な心には涙が溢れたからである。新たな震動と火災のなかで悔悛の情が各人に俗事を忘れさせた。断罪の恐怖で体は震え、神の慈愛を求めて心は燃え、繰り返し溢れる涙で息も窒まるようである。再会した人たちは会釈してたがいに赦しを求め、それまでの対立と憎悪を解いた。こうした態度を採らず、いわば憂き世の災難としか思わぬ者もいる。多くの異端者が己れの迷妄を恥じらい、恩寵のもとで新たに生まれた。

【第四八九項】 国王陛下とご一家はベレンの離宮において被災を免れて田園へ避難され、そこに建設された立派な仮設御所で数ヶ月生活された。(マヌエル王親王だけはネセシダデス宮殿に住んでおられた。) こうして造られた広大なアジ

ユダ宮は、壮大で完璧で木造とは思えないほどである。これら高貴な方々の安否を気遣う人々は、国王ご一家が危機から脱したのを知ってみな喜びに耐えず、リズボン艱苦の当日愛する者や信頼する者とその喜悦を分ち合った。

【第四九〇項】 最初の夜から悲痛な叫び、絶えざる衝撃、続発する地震へ恐怖、かつまた王都のほとんど全域を襲う火災が、すべての人々の艱苦を倍加させ、財産の欠如と両親の配慮の喪失を痛感させた。大半の家族が引き離され、頼るすべもなく泣き続ける。かくも多くの苦難に耐えうる人だけが、神意により救われると思われた。

【第四九一項】 火焰は家々を焼き続け、地震も衰えを示さない間に、罪深い盗賊は神をも炎をも怖れず、侵入した邸宅で金銭、宝石、衣類を掠奪した。地震でも家が崩れず、火災の被害も受けぬ多くの家族が、盗難によって文無しになった。これらの多くはガレー船を科せられた罪人や牢獄から脱走した囚人に帰せられる。

【第四九二項】 火災の連続と地震の続発によっても私たちは祖国と国土への愛を忘れなかった。神は罪人の赦免を望まれ、魂の救済のため大地を示された。王国のあらゆる都市、町村、地域にいる近親や友人を求めて、その土曜日多くの人々が歩き続けた。以後幾日も悩める旅人が街道に溢れる。近郊の野に留まる人々は、豪華な寺院、壮麗な宮殿、神聖な殿堂、さらには宝石、調度、衣装など多くの富が炎上するのときには目のあたりにした。

【第四九三項】 私はこれらの災害の目撃者である。自宅で最初の震動に襲われ、眼前で庭も崩れたが、神の慈悲で自分は救われると感じた。家族すべてに傷害はなく、被害を免れた自宅にしばらくいた。サンタ・バルバラの野へ行くと、主キリストの慈悲と聖母マリアの加護への祈りが続けられ、私は深く感動したが、祈祷に没入できなかった。数千人が暮らし、数名の神父も住む地域を、城郭炎上の恐怖が無人にしたのである。そこには市参事会の資料保管室もあって、所有地に関する重要文書一万六百件蔵され、それらを保管するのが私の大切な職務であった。危急の際そうした書類を防備するため、建物の門口を離れてはならなかった。少数の人たちの協力を得て、そこで最初の数日を過ぎたが、惨禍と脅威しか見えず、悲鳴と号泣しか聞えなかった。

【第四九四項】 敬虔な家族や寄り合う民衆が毎日祈禱を続け、聖像ペンハ・フランサの前で聖母マリアの加護を祈った。ほとんどが半裸であつて、みな平伏したままである。近親の安否の知れぬ人は、声よりも涙しか出ない。被害や生死や災厄について尋ねることなどできなかった。掘り出された生きものは色も形もなく、すべてが悲痛であり、悲惨である。太陽の光が消え、いつも物寂しい夜がいまやきわめて怖ろしく感じられる。なぜなら、喜悅と時刻と調和を告げる鐘が消失し、一切が不気味な沈黙に包まれ、怯える生きものも声すら発しないからである。

【第四九五項】 なによりも神への愛と隣人への博愛が人々の心に溢れた。敵同士が抱擁し、たがいに赦しを求めた。友人や知己が生きているのを知り、たがいに祝福した。肉親や財産をなくした人も親身に慰め合う。徳高く誉むべき行為であるが、ながくは持続しなかつた。

【第四九六項】 埋葬されない遺体が寺院や街路、さらには建物の残骸のなかに横わつていた。極度の苦悶を続ける重傷者は、生き延びるよりも死を願つた。比較的軽度で生き残れる負傷者も、荒墟において救援を得られず、多数死亡した。死者を葬るため迅速に行動するよう、総大司教枢機卿猊下は聖職者と教区司祭に指示された。同じ配慮を国王陛下も示され、人々を適切に導くため国王軍の将校を重要な用務に任命された。聖職者ではないが、こうした活動に幾人かが献身的に従事した。ラフォエス公爵の弟、ジョアン・デ・ブラガンサの深い徳業は傑出しており、倒壊した建物の危険を冒して日々働き、あまたの生物を救つたり、多数の遺体を埋葬した。サンパヨー殿も怖ろしい危険をも顧みず、幾人かと協力し、数週間同じような作業を続けた。二四〇の遺体が墓に葬られ、多くの生命が荒墟から救出された。治療のため病院へ運ばれた者もある。天の特別な恩寵によって荒墟で生き残つた人のなかには、四日後にペンハ教会で救出されたひとりの男性、七日後にサンタ・マリア大寺院で救出された他の男性、そしてカノス街で九日後に救出された少女が含まれる。

【第四九七項】 称賛すべき愛徳をもつて若干の貴族は外科医を伴つて数日間田野を巡回し、放置された負傷者を治療した。王立誠信病院の指示によつてサン・ベント修道院とサン・ロケ修道院に困地が設けられ、無数の負傷者をそこへ運んで、多くを治療した。彼らの大半は腕や脚を切断し、多数の負傷者が傷口からの壞疽で死亡した。

【第四九八項】 王都の中核全体が怖るべき沙漠と化し、火災で黒焦げの高層建築の先端以外には、瓦礫の山と灰燼の山しかなく、いつも大きな人波と豊かな財富で溢れた大道も、形跡しか見当らない。王都を熟知する人は、どこに踏み入れたか判らず、惨憺たる現実を見て、脳裡の記憶を疑ったのである。

【第四九九項】 総大司教猊下はミサの供物を捧げるため、田野に運搬できる祭壇の製作を命じられた。また、万聖節の当日必要なものを持ち運び、サンタ・バルバラの野でもミサが行われた。

【第五〇〇項】 リスボンの住民は近郊の田野や王都の周辺を放浪した。ここでも神慮の偉大さが明白に感じられた。幾千もの家族が住居も衣服もなく、食物を買う金子も持たず、悪天候から身を護るのに必死であったが、慈愛深く至高なる父に彼らは支えられ、飢餓で絶命する者はなかった。

【第五〇一項】 慈父の心と王者の勇氣をもって徳高き国王陛下は、広大な田野に居続ける幾千人にも必需品を支給するよう命じられた。ベレンへ移された者には、必要に応じかならず医薬が供される。多数の王族や沢山の外国人にも仮設小屋や板塀用の木材が調達された。

【第五〇二項】 この災厄に率先して王族のアントワーヌ殿下、ジョゼ殿下、ガスパル殿下は、寛仁と高潔な気概をもって対処された。壮大なパルハラ宮殿の広大な緑地では、庭園と森に千人以上が収容された。みな充分な食糧を提供され、数ヶ月そこに留まる。彼らの需要を充たすため、沢山の衣服も送られた。こうした親身な厚意と大いなる博愛に対して到るところから讃辞が寄せられる。その名声は世界に伝えられ、三殿下の徳業が遍く称讃されるに至った。

【第五〇三項】 すべての聖職者は僧院の門戸を開け放ち、幾百もの家族を受け入れた。あらゆる場で多くの博愛がなされたが、改革的な聖アウグスチヌス修道参事会員と博学なサン・フィリップ・ネリ（オラトリオ）会士がとくに際立ち、サン・ヴィセンテ修道院とネセシダス修道院の構内に多数の家族を避難させた。

【第五〇四項】 多くの貴族や個人が博愛という美德を実践し、能うかぎり最

大の寛仁をもって邸宅や農園にあまたの民衆を寛大に受け入れた。すべては徳業の機会を授けるといふ神の意向である。主イエスは貪欲な者の多くを気前のよい慈善家に変身させた。つねに神慮が無限に偉大であることに感嘆する！

【第五〇五項】 地震と火災はきわめて大規模であり、人口稠密な王都の主要かつ最良の地域を崩壊させ、破滅させた。地震による様々な破壊について述べたあとは、火災による大規模な被害についてまず語ろう。

【第五〇六項】 旧市街の大半と新市街の多くが火災によって灰燼に帰した。火災の被害を受けた範囲を描けば、円周一レガ以上に及ぶであろう。火の手はサン・パウロ教会から始まり、沿海部の広域へ広がった。円周はこの教会からルモラレス、王宮広場、ナオス河岸、王宮広場、シダード河岸、カエス・デ・サンタレムを経て王の泉にまで到る。そこからサン・ペドロ拱門とサン・ジョアン・プラサ教会の背後へ登り、サン・ジョルジエ教会へ向った。さらにそこからサント・エロイオ修道院のサン・マルチノ教会正面へと登り、サン・バルソロミウ教会正面まで抜つて、城砦をも脅かす。坂を下つて火の手は、アンソルフア門、サン・パトリシオ・コレジオ、サン・マメド教会、城砦海岸へ進み、サン・クリソヴァオ教会の側面と正面を経て、ボラテーム井泉裏手のサン・ジュスタ教会の背後へ達した。王立病院とサン・ドミンゴ修道院へも燃え抜つて、ロシオ広場で修道士小路へ転回し、カダヴァル公爵の宮殿を通り、ガリシア街、コンデッサ街、オリビエラ街を経て、三位一体修道院に入る。ついでサン・ロケ教会裏手に登つて、ノルテ街、カラサテス街、バロツカ街、アタラヤ街のそれぞれ大半を焼き尽し、改宗者修道院門前のカルカダ・デ・コンプロ街を横切り、シヤガ教会を通つて、サン・パウロ教会の背後、火の手に描かれた円周の起点へ帰還したのである。

【第五〇七項】 こうした円形のなかでいわゆる河岸地区、ノーバ街、ロシオ、そしてレモラレス、アルト・バイロ、リモエイロ、アルファマの諸地域の大半が火災によって完全に壊滅した。これらは首都を構成する十二地区のうちも最も富裕で人口稠密な七つあたる。火焰に焼き尽くされた王都の広大な部分には総大司教教会、およびサンタ・マリア大寺院（リスボン大聖堂）、およびサンタ・マリア・マグダレーナ教会、聖母受胎教会、サン・ジュリアオ教会、殉教者教会、秘蹟教会、サン・ニコラウ教会、サン・マメド教会、サン・バルソロミウ教会、サン・ジュルジエ教会、サン・ジョアン・ダ・プラサ教会の諸教区が完全に含まれる。また、サン・パウロ教会、托身教会、サンタ・ジュスタ教会、サンタ

・カタリーナ教会、サン・クリストヴァオ教会の諸教区（これらでは教会も焼失した）、および城砦にあるサンタ・クルズ教会の教区もそうである。

【第五〇八項】 この圏内では豪華な三位一体修道院、カルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、アイルランド・ロザリオ修道院、聖霊修道院、ボアホラ修道院、キリスト教団修道院、サン・ドミンゴ修道院、サント・エロイ修道院が、それぞれ豪華で壮麗な教会とともに灰塵に帰した。城郭の会堂、サンタ・マリア・マグダレーナ改宗者修道院、サン・ロレンソ・カルモマリア孤児院も同じように被害を受けた。

【第五〇九項】 サンタ・マリア大寺院（リスボン大聖堂）では時計塔をはじめ古式で雄大な建造物が地震によって倒壊し、教会の炎上によって礼拝堂、事務所、控室もすべて破壊されたものの、壮麗と讃えられる優美な立像、聖母マリア奇蹟像とその衣装がなんらの傷痕もなく護られた。

【第五一〇項】 豪華なサント・アントニオ教会は聖アントニオその人が往事暮した旧蹟に建立されるが、かつてリスボン分割のとき市参事館であった壮麗な建物とともに、また堂内を飾る沢山の銀細工や豪華な装身具とともに、サンタ・マリア大寺院の教区壊滅の際に焼失した。その裏手にあつて聖歌殿は地震による破壊を受けなかった。人々はそこで驚くべき聖アントニオの奇蹟を目撃した。中心部の礼拝堂ではきわめて炎上が激しく、銀や銅などの祭具まで溶解したのに反し、聖歌殿はそこからやや離れ、地震と火災を免れたため、燈明や多くの装飾に照らされたまま、祭壇の聖アントニオ像は安泰であつた。

【第五一一項】 同じくこの教区で愛徳信心会の教会と建物が炎上し、マグダレーナ教区では孤児院の教会と施設、聖霊礼拝堂から独立したサンタ・アンナ慈愛病院、サン・セバステイアオ教会、聖母受胎教会とキリスト教団修道士コレジオ教会、さらにサン・ジュリアン教区ではオリヴェイラ古礼拝堂、サン・ニキウラオ教区ではパルマ礼拝堂、ヴィクト礼拝堂と付設の病院、キリスト昇天教会、サン・ジュスタ教区では万聖節王立病院、アンパロ礼拝堂、難病治療病院、慈恵礼拝堂、サン・バースロミュ教区ではサンタ・カテリーナ・コレジオ、托身教区では壮大なイタリア・ロウレト教会、シャガ教会、アレクリム礼拝堂である。サン・パウロ教区では慈恵礼拝堂、通称では聖体礼拝堂が地震と火災を免れた。

【第五一二項】 焼尽した殿閣を挙げると、第一はリベイラ王宮であつて、マノエル国王によつて創建され、引き継ぎフィリップ二世のもとで豪華にされたあと、今世紀に至り贅沢な建造による優美な広い回廊を増築され、先頃きわめて壮麗な王立歌劇場がヨーロッパ諸国で称讃を博し始めていた。ついで孤児院を付設するコルト・レアル宮殿（以前にも火災を蒙つたことがある）、ラフォエンス公爵邸（宝物殿でもあつた）、アヴェイラ公爵邸、ヴァレンス・アンジエジャ侯爵邸、フロンテイラ侯爵邸、カスカエス侯爵邸、サン・ティアゴ伯爵邸、リベイラ伯爵邸、キユキリム伯爵邸、ヴィラ・フォール伯爵邸、ヴァラダレス伯爵邸、アヴェイラス伯爵邸、アトウギア伯爵邸、ヴェミエイロアルバ伯爵邸、バルバセナ子爵邸。やや遠いがルリサル侯爵邸もこのとき焼尽した。

【第五一三項】 同じく被害を受けたのは王立税関所の大建築、インド商館、測候所、領事館、王立会計院、七商館である。王宮広場、ナオス河岸、コンソラカ才門前の国際市場とその倉庫、王立裁判所法廷、行政評議会、財政評議会、海外評議会、信教評議会、ブラガンサ館、戦時会計総院、将校宿舎、貯蔵倉庫とその広大な事務局、国務・戦争・航海の諸省庁もこれに含まれる。なお、官庁の本部は王宮の敷地であり、それらの文書保管所では無数の蔵書や書類を喪失し、国家と諸機関に多大の損害を与えた。また、アルジューベの聖職者懲戒所ふたとトロニコ聖職者懲戒所も同じく炎上した。

【第五一四項】 火災によつて焼尽したもつとも貴重な品々のなかで、あまたの浩瀚な書籍の喪失が学者には痛恨の極みである。随一とされる王室図書館には貴重な書籍がきわめて多数蔵されていた。そこには英知と度量の発露として国王ジヨアン五世が、近年の莫大な書物に加えてヨーロッパで涉獵されたあらゆる古書や優れた稿本の複写を納付されたのである。

【第五一五項】 ルリサル侯爵の広大な四棟の建物は稀覯本や優れた稿本で満たされ、飾られていた。博学のエリセイラ伯爵のもとで始められたのち、フラシスコ・ザビエル・メネゼス伯爵によつて完全なまでに追補され、後者の英知と該博な識見は歿後ポルトガルと全ヨーロッパで称讃を博した。

【第五一六項】 サン・ドミンゴ修道院の図書館はふたつの広大な建物から成り、博学なベネディクト修道士フランシスコ・レイタオ・フェレイラの蒐集による多数の稀覯本や稿本を蔵していた。マヌエル・ギルヘルム神父の高配とふたり

の司書の協力によって、これらの公刊と増補がすでになされていた。

【第五一七項】 聖霊修道院にも広範で精選された図書館およびマリアナと呼ばれる別の図書館があり、ドミンゴ・ペレイラ神父によって設けられた後者は、聖母マリアに関する膨大な蔵書として尊重されていた。

【第五一八項】 同じようにカルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、三位一体修道院、ボアホラ修道院に蔵される由緒ある優れた書籍も灰塵に帰した。それらと同じくどの豪邸でも貴重な蔵書が焼失した。

【第五一九項】 個人の蔵書も多数失われ、なかでも異端審問官シマーオ・ジヨゼフ・シルベイロ・ロドのあまた精選された書物が非常に惜しまれる。五人の豪商の邸宅ではフランス語、スペイン語、イタリア語の書物が、またポルトガル書籍商の二五の店舗と邸宅でも大量の優秀な版本が焼失した。

【第五二〇項】 地震によりサント・アンドレ教区教会、サント・カトリーナ教区教会、サン・マルティノ教区教会、サン・ペドロ教区教会、ペーナ教区教会、救援教区教会、サルヴァル教区教会、サン・ティアゴ教区教会が完全に破壊された。また、ドス・アンジヨス教会、サン・クリストヴァオ教会、サンタ・クルズ・デ・カステロ教会、サント・エステヴァオ教会、サン・ジヨゼフ教会、サン・ロレンソ教会、サンタ・マリナ教会、メルセス教会、サン・トメ教会は多大の被害を受けたが、倒壊には至らなかった。

【第五二一項】 大きな建造物はすべて深刻な破壊を蒙った。豪華な聖アウグスチヌス会サン・ビセンテ教会では穹窿も破壊され、正面を飾る碧玉や寶石の彫像も崩れたが、修道院の被害は軽少であった。慈恵修道院と慈恵礼拝堂では大きな教会、充実した聖器室、修練士の館、麗しく浩瀚な図書館が倒壊した。そこでは蔵書も大きな被害を受け、美しく新しい回廊、さらには鐘楼などの建物も著しく破壊された。同じ修道会のペンハ・フランカ修道院では教会が倒壊し、僧坊と回廊が著しく破壊された。この宗派に属するサント・アンタオ古修道院では教会が倒壊し、僧院が破壊された。イエスズ会のサント・アンタオ・ドス・パドレス・コレジオでは高貴な教会の穹窿が墜落し、僧院の広い廊下が著しく破壊された。サン・ロケ誓願所（サン・ロケ教会）では正門が倒壊し、鐘楼などの建築が破壊された。コトビア修練院は教会と僧院に被害を受けた。サン・フランシスコ

・ザビエル・コレジオ、ナザレス・アロイオス修練院、そのほかイエズス会の建物すべても同じような顛末となつた。第三サン・フランシスコ会イエズス修道院も教会と僧坊が著しく破壊された。サン・パウロ修道院の崇高な聖体は宝庫に蔵され、損傷を免れた。神慮による破壊は巨大であり、イギリス系のサン・ペドロ・コレジオとサン・パウロ・コレジオも類焼した。サン・ペドロ・アルカントラ修道院とその教会も瓦解した。カプチン会サント・アントニオ修道院も著しく破壊され、その教会も倒壊した。サン・ベント会エストレラ修道院では教会が全壊した。荘重なサン・ベント修道院、イエズス・ボアモルテ修道院、カルメル会跣足アレマエン修道院とそのサン・ジョアン・ネプミュセノ教会は軽少な被害であつた。

【第五二二項】 尼僧修道院、サン・チャゴ騎士団修道院とサン・ベント・デ・アヴィス騎士団托身修道院は多大の被害を受けた。サンタ・アンナ修道院では教会および古い僧坊の片側が崩れた。サンタ・クララ修道院では教会と修道場が全壊に近い。望徳修道院でも多くの箇所が破壊された。聖母マリア修道院では外壁に被害を蒙り、サンタ・アポリア修道院も同じ結果である。受胎告知修道院とその教会も多大の被害を受けた。サンタ・モニカ頌歌修道院では教会を別として全壊した。救世主修道院の被害は小さいが、教会が倒壊した。受難修道院も同じ結果である。薔薇修道院とその教会は多くの被害を蒙つた。トリナスド・モカノンボ荘嚴修道院も著しく破壊された。しかし、カンポリド施療修道院は損傷を免れた。カルメル会サント・アルベルト修道院は多少被害を受け、カルダエス聖母受胎修道院はかなり損傷した。十字架修道院はほとんど破壊された。ベルナルド会ナザレス修道院は全壊した。

【第五二三項】 アンパロ孤児院、保護施設、さらにはおよびサン・クリストヴァオ教区の保護施設、改宗者のための聖霊カルダエス修練所も多大の被害を受けた。

【第五二四項】 サンタ・クルス・デ・カステロ教区ではサン・ミゲル僧院と聖霊僧院、アンジョス教区ではモンテ僧院（サン・アゴスティノ僧院の旧蹟）とイエズス・マリア・ジョゼフ僧院が多大の被害を受けた。同じ結果に至つたのは、サント・エステヴァオ教区では施療教会とその病院、サン・ジョゼフ教区ではサン・ルイズ・ダ・ナカオ・フランザ教会、救援教会教区では保健教会、処罰教会教区では由緒あるサン・ラザロ僧院、托身教会教区では清貧聖職者聖母受胎教会

である。

【第五二五項】 破壊された殿閣はベンポスタ宮殿、異端審問所、枢密院、さらに落成間近な観覧席である。この観覧席は徳高き君主に相応しい建造物であつて、広場を引き立てるよう陛下が設計と建造を命じられた。観覧席に釣り合つて広場には雄大な建物が連なり、壮麗な礼拝堂、閣僚の豪邸、リスボン市庁、市参事会館、聴聞室があつた。タボラ侯爵邸、アレグレット侯爵邸、ニザ侯爵邸、タニコス侯爵邸も大きな被害を受けた。ヴァル・デ・レイス伯爵の豪邸もなれば破壊された。ヴィセント伯爵、ソウレ伯爵、ミグエル伯爵、ウンハオ伯爵、ヴィラ・ノヴァ・ダ・セルヴェイラ子爵、メスキテラ子爵の豪邸も同様である。

【第五二六項】 モンテイロ邸、ポルテイロ邸、ムルカ邸、ジョゼフ・フェリックス・ダ・クンカ邸、ジョゼフ・デ・メネザス邸、プリンパル・アラン八邸、ダニス・デ・アルメイダ邸、ジョゼフ・ジョワキム・デ・ミランダ・ヘンリック邸、クリストヴァオ・マヌエル・ヴィルヘナ邸、そのほか沢山の豪邸が大きな被害を受けた。激流は石造の堅固な埠頭を越えて、王宮広場の河岸を襲い、ヴェドリア要塞のほぼ正面、税関事務所のある倉庫にまで迫つた。激流の凄まじい勢いに圧倒され、この地が沈没すると戦慄し、多くの人々が地震によつて崩れた石材で、防壁を必死に積み上げる。国王陛下の指令によつて陸軍大佐のカルロス・メルデル、大尉で技術者のエウゲニオ・ドス・サントス・カルヴァロが埠頭を調査し、河底に漂う石材を探索して、破滅の兆候はないと声明した。

【第五二七項】 リスボン郊外では聖ジェロニモ会の有名な修道院とベレン教会、三位一体アルカンタラ解放教会がかなりの被害を受けた。ルツズ教会、キリスト騎士団修道院の一部と付設の精神病院は倒壊。ティヘラスコム天国門修道院とその教会は全壊した。マリアノ・デ・カルナドス教会も同じく崩壊し、サン・フランシスコ・ザブレガス修道院は教会と僧坊に多くの損傷を蒙つた。サント・エロイオ神父会のサン・ベント修道会はほぼ被害を免れた。

【第五二八項】 聖ベルナルド会の壮大なオデイヴェラス僧院は多大の被害を受けた。聖アゴスチノ修道参事会員シエラス修道院はかなり損傷。カルニド聖母受胎修道院は全壊した。真正救済修道院は被害が軽く、秘蹟修道院も同様である。

【第五二九項】 破壊を免れた巨大な建物は、ベレン王宮の諸建築、ネセシダ

ード宮殿、壮大で豪華な建築であるオラトリオ会秘蹟修道院、イタリア・カプチン会およびフランス・カプチヌ会のそれぞれ修道院と教会、橄欖山跣足アウグスチヌ会の修道院、ラヴライド侯爵の豪邸などである。

【第五三〇項】 リスボンの地における大地震が人々に与えた衝撃を判断するには、首都を覆った状況について述べる必要がある。著名な建物を列挙するのみでは、各地域の被害を理解させえないからである。市内および近郊で火災を免れた全域を再三私は視察した。それらさまざまな街路や地区で多々考察した結果、火災は王都の三分の一を焼尽し、そうした圏内の大半は狭苦しい街路に四階・五階・六階建の住居を連れ、より人口稠密な地域であったように思われる。また、地震はリスボンの建物の十分の一を倒壊させ、その三分の二を住めなくしたが、三分の一弱はなお居住可能なのである。ただし、大きな修復を必要とする。協議を不要とする所有地はなかった。地震と火災で有名となった王都の状況についてこれが比較的正しい情報である。

【第五三一項】 リスボンの地震、火災、津波による死者の数は、正確な数値としては実際に定め難い。そこでの人口稠密な地区が大半灰塵に帰し、ほかの地区も瓦礫に埋もれ、全市が無人の荒野と化したのを地震の数日後に目撃した人は、惨憺たる光景に驚倒して、住民の大半が死亡したと語った。(ヨーロッパ全土で多くの人士がそのように書き、公にされた。)より控え目に二分の一と言う人もあり、三分の一と述べる人もある。この場合あまり考慮されていないのは、数限りないリスボンの家族が王都近郊の全地域、広範な首都圏の裁判管轄区全四十地区、さらには王国全体のあらゆる都市と街々、ほとんどの村々に避難したことである。多くの住民がリスボンからローマへ、あるいはヨーロッパ諸国のあらゆる大都市へ逃れたとも考えられる。

【第五三二項】 こうした省察や情報の欠如のため以後数ヶ月多くの執筆者が死者の数についてかなり不適切で不正確で算定を記した。この地震の被害一覧を初めて書いたジヨゼフ・デ・オリヴェイラ・トロヴァオは、正確な情報というよりもむしろ詩的な表現で、七万人が死亡したと述べた(同書十一頁)。「哀切な劇場」と題する作品の著者は住民の三分の一が絶命したと信じる。アントニオ・デ・サクラメント神父は『激励の慰藉』のなかで一万八千人以上が死んだと語り、この見解が妥当な数値と思われる。「情報と忠実な記述」の著者はリスボン住民の十分の一が死亡したと推定する。(地震直後の執筆であるが、彼は非常に思慮

深い。)また、『リスボン壊滅』の著者も死者は住民の八分の一と推算した。

【第五三三項】 各教区の司祭に確認を命令され、国王陛下がどのような算定を下されたか、私は知らない。しかし、莫大な数値であったと推測する。地震尾のあとこの確認は急遽命じられ、動乱の最中としては立派な集約である。調査自体が目的ではなく、対処すべき課題の究明と思われる。

【第五三四項】 この物語における論点の一つであるから、私も可能なかぎり厳密に調査したいと思う。なぜなら、地震の一週間後にはみな見方を控え目にしたし、数カ月後には十万人もの死者ではないと強調されたからである。そこで私は確認できる見解を得られる方法を考え始めた。街々に私が出向き、近隣から消えた住民について数カ月後どうなったか、まずひとりに尋ねてみる。こうした面倒な調査を始めたが、時間の不足によって続行できなかった。その代りに私はリスボンのあらゆる街々の情報を集めた。また、別の見地から五人が死亡したとされる教区の司祭を捜した。教会から避難できた沈着な民衆は、死んだ人数がそれより多いと言う。住宅や街路や教会で地震と火災により歿した人々について、私はつぎのように推論する。宗教組織と聖職者団体のすべて、貴族・閣僚の多数の連合、世俗的な同業組合、さらには司法機関と行政機関において消えた人数を確認してみよう。これらすべてについて推算した結果、記帳の仕方に大差はないので、地震の当日倒壊や氾濫や火災に巻き込まれた人数は五千有余かそれよりすくないと考える。また、治療を受けた無数の負傷者のなかで、病状の悪化により十一月のうちに加えて五千人死亡したことは事実である。この問題をめぐり厳密に算定できるのは以上に尽きる。

【第五三五項】 逝去した聖職者はフランシスコ・サレジオ会修士二一名、テルシオ会修士二名、カルメル会修士十五名、三位一体会神父一六名、伝道師聖ヨハネ聖堂参事会世俗会員七名、聖アウグスチヌス会修士五名、ポルトガル・ドミニコ会修士三名、アイルランド会修士四名、イエズス会士三名、聖カミロ会修士一名、オラトリオ会修士四名、慈悲会修士一名である。

【第五三六項】 ドミニカ会修道女は受胎告知尼僧院において十名、救世主尼僧院において十四名死亡した。フランシスコ会修道女はサンタ・アンヌ尼僧院において五名、カルバリオ尼僧院において二二名、サンタ・クララ尼僧院において六三名歿した。また、聖アウグスチヌス会修道女はサンタ・モニカ尼僧院におい

て八名死亡した。

【第五三七項】 貴族で死亡した男性はアンジェジャ侯爵の子息で総大司教
会総長のフランシスコ・デ・ノロンハ、さらにガスパール・ガルヴァオ・デ・カ
ステロブランコ卿、マノエル・デ・ヴァイコンセロス卿、リスボン異端審問官ウ
アレジャオ・マヌエル・デ・タヴォラ、アントニオ・デ・メロ・カステロ、ロッ
ク・デ・ソーサ、國務尚書フランシスコ・ルイズ・ダ・クンハ・エ・アタイデ、
戦争大臣ペドロ・メロエ・アタイデだけである。なお、スペイン大使のペララダ
伯爵ベルナルド・デ・ロカベツチも駐在する公邸で逝去した。

【第五三八項】 上位貴族の女性ではマリア・ダ・グラサ・カストロ夫人、年
長の令嬢とともにルリサル侯爵夫人、ゴンザロ・ザビエル・アルコバ・デ・カル
ネイロの配偶者アンナ・デ・モスコソ、またロレンコ・デ・アルメイダの未亡人
が令嬢とともに死亡した。

【第五三九項】 博学の神父であるオラトリオ会アントニオ・ペレイラ・デ・
フィゲイレドに私は依拠している。神父は精密な調査を行って、註解を加えた。
彼の簡潔な著作はこの災害に関する文献として筆頭に挙げられる。ラテン語とポ
ルトガル語で併記され、リスボン大地震の被害を世界に伝えたのである。

【第五四十項】 リスボンの地震と火災によって焼尽した建物、不動産、機具、
宝石、金貨と銀貨、農地は巨額に達し、その際は測りしれない。『地震等歴史
物語』の著者はさまざまな算定を付記しているが、みな恣意的なものと私は判断
する。そのような算定とは別個に私が行った調査は、かなりの程度より正確と思
われる。ここに提示する若干の原理により、損失は莫大であったと推算する。

【第五四一項】 リスボンの寺院で聖なる礼拝に捧げられる富は、いかにして
も凌駕できないとすべての民族が告白する。富裕な都市の大半でのこれに劣らな
い。すべての教会には神への礼拝に供するため、金銀や貴重な宝石を鑲めた多数
の聖杯、十字架、シャンデリア、大燭台、照明、聖器類が蔵され、豪華にも聖櫃
の飾り布、祭壇の台座、説教壇の飾りに銀が施されていた。これらの装飾には錦
の布地、絹織物、ビロードの刺繍、金の紐やふさ飾りが用いられる。大抵は教会
の全体に豪華な造作が配されていた。多額の経費をかけて広大な本殿は、麗しい
石材で建造され、数多金の彫刻と一流の絵画に飾られていた。金と銀しか見られ

ず、豪華な装飾を施した総大司教教会には、どれほどの富が蔵されたであろうか。国王ジョアン五世の豪華な趣味の所産すべても同様と考えられる。リスボンの大聖堂、サンタ・マリア大寺院についてもそうであるう。

【第五四二項】 王宮とその大宝物殿ふたつには精錬された宝玉、黄金、銀が満ち溢れていた。それらはフンソエン地方で驚くほど大量に採掘され、ほかでは僅かしか得られないものである。宮殿と宝物殿にはもつとも貴重な武器が多数保管されていたのではないか。したがって、リスボンが裕福で贅沢な都市であること、すなわち一介の土木技師ですら多くが金や銀や宝石を持ち、絹やピロードの織物、最良の材質の家具を所有することが判れば、裁判官や貴族の殿閣と邸宅で灰塵に帰した財富、すなわち宝石、貨幣、武器、家具を逐一点検する必要はない。

【第五四三項】 焼尽した王都の一部がもつとも富裕な地域であることを重視すべきである。なぜなら、そこにはきわめて多くの教会と殿閣、さらにはそれらの君長が鎮座するだけでなく、ポルトガル貿易商の大半や実業家の全員が住むからである。同じく留意したいのは、この地域にふたつの目抜き通り、金座と銀座があり、四つの広い道路を毛織物や絹織物の商人が拠点とすることである。また、市中を練り歩き、極上の装飾品を売り捌く商人で殿閣の中庭は混み合っていた。リスボンの三つの中心地では小間物屋や食品問屋が軒を連ね、工芸ギルド街はもつとも豊かな階層をつねに呼び寄せた。

【第五四四項】 王立税関所、インド商館、タバコ栽培園、商工会議所で焼尽した財産は、算定し難い。これらの建造物はきわめて広壮であり、人口稠密な首都に満ち溢れるあらゆる種類の財貨でつねに一杯であった。外国人が多くの財貨を有し、大きな邸宅を借りていたことも、留意すべきである。

【第五四五項】 かつまた火災によっていかに多くが焼失したかを省察し、リスボンの富がいかに無限であったかを考えてほしい。数多のポルトガル人が歿し、王国も共同体も商都もこの火災によって消えた。

【第五四六項】 国王陛下は熱情ある行動的な國務尚書、ジョセフ・カルバルホに補佐され、この博学な行政官を介して、国民の救済・安全・保護とリスボンの輝かしい復興のため、緊急政策を発布された。すべてが的確な決意、賢明な措置、神聖な法令であった。

【第五四七項】 早くも十一月一日国王陛下は國務尚書を通じて、リスボン市参事会議長アレグレト侯爵に、壊滅した王都とすべての地域を救うため、軍隊、人材、資金、さらには王立貯蔵倉庫を運用するよう指令された。これこそ国王陛下の仁愛を示す不朽の証左であり、わが宮廷の信義と榮譽である。やがてリスボン市参事会の対策本部を王宮広場とリベイラ河岸に設け、火災を免れた地区や水路に頼る人々へ、国王軍の支援のもとに食料を分配するよう決定された。(これも各地区の責任者が点検することも命じられた。) また、陸路で往来する人々にも混乱なく分配すべく、食料をリスボン市門に用意することも対策本部に指示された。こうした分配の実施を監護するため、監督官にはニクラウ・ルイズ・ダ・シルバとアントニオ・ロドリゲス・デ・レオンが起用される。これらの方々は多大の熱意と尽力をもって行動され、リスボン市民救援のため食糧の確保にも奔走された。国王陛下もあらゆる王室の利点と裁可の権限を、市門へ出荷される食品すべて、さらにはベレムのサンタレム河岸で取引される魚介類すべてに適用し、翌年一月までそうした裁量を継続するよう命じられた。震災直後の数日とくに懸念された飢餓が、この賢明な措置によって完全に防止された。

【第五四八項】 まもなくエヴォラの竜騎兵隊とペニツシュ、エルヴァス、オリヴェンサの各歩兵隊が王宮へ招集され、近衛兵隊の四分の一がベレム、カンポリド、コロヴィア、カンポ・サンタ・アンア、カルダル・ダ・グラサ、さらに(ロシオ)四辻に駐屯し、主要な街路の管理にあたった。彼らの駐屯をアランテージョ州の連隊が引き継ぎ、竜騎兵隊は数カ月以内に本来の部署に戻るよう定めじられた。こうした必要に応じて応じて応急の兵舎が木材で建造された。

【第五四九項】 神を畏れぬ大規模で多様な掠奪が王都で頻発するとの報告がなされたので、流れ者を取り調べるとともに、疑わしいと思われる人物、リスボン大審院長(ラフォエス公爵)の通行許可証を携えぬ人物を検束し、莫大な盗品をリスボンで差し押さえるよう、同じく國務尚書をおし国王陛下は命じられた。さらに大審院長は閣僚の手勢となる司法官と法学士を任命され、王都十二地区の監査官のもとで両者の連携を確立するよう指示された。すべて掠奪の容疑者を簡略な調書によって起訴すること、また大審院長に任命された裁判官が、事実自体の確認と原告自身の陳述に基づいて判決を下し、特例として迅速に即日容赦なく処刑すよう、十一月四日の勅令で命ぜられた。この勅令によって大勢の罪人が死刑を宣告され、数カ所に設けられた絞首台で処刑された。おぞましくも

彼らの遺体は数日間絞首台の脇に曝されたのである。懲役に処せられ、瓦礫の除去作業を命じられた罪人も多い。掠奪という人災がこれによって根絶された。

【第五五〇項】 だれもが飢渴しており、種々の食料品が高騰した。用務も急増する反面、人手が減ったため、法外な賃金も要求された。国王陛下は勅令を発せられ、すべての食料品を十月末の価格で販売すること、いかなる仕事や労務者であるかと、通例以上の賃金を与えてはならぬこと、かつまた違反者には刑罰として瓦礫除去の作業を科すことを命じられた。

【第五五一項】 ときには住民が非常に高い家賃で住宅を借り、地主も法外な借地料を要求することを、同じく国王陛下は聞き及ばれ、震災後の賃貸契約書をすべて無効にし、裁判所の査定手続なしには土地を賃貸してはならぬ、と十二月三日の法令に定められた。なお、住居に関しても同様の措置が下され、震災以前の家賃から逸脱せず、従来のお金をほぼ保持すること、また違反する場合には財産を没収することが警告された。

【第五五二項】 王都の範囲をアルカンタラ、アルコ・デ・カルバルハオ、カンプリド、クルズ・ドス・カトロ・カミンホス、サンタ・アポロニアなどの市門の内部に限定しつつ、この地域では特別の認可なしに家屋を建ててはならぬと、同じく十二月三日の法令により命じられた。

【第五五三項】 まもなく最高の技術者マヌエル・デ・マイヤにリスボン全地区の設計図を作成することを命じられ、雄大な構想の公表に期待を寄せられた。かくして大きな広場や真直な道路を造るとともに、均等な高さ、六十フィート、五十フィート、三十フィートにして左右対称の調和ある建物を築き、焼尽した王都の再興のためすべてを改革する全体計画が立案される。こうした計画の公表以前に新たな住宅を建てたり、破壊された建築を再建することは、王都のふたつの法令によって禁止され、執行の妨げとなる境界画定がただちに無効とされた。

【第五五四項】 大都会に居住する住む多くの多数が、数日間または数週間離散して近郊に逃れ、ついには国中をさまよったあと、王宮広場、テージョ河畔、サンタ・アンナ公園、サンタ・クララ公園、サンタ・バルバラ公園などリスボンの主要な地点へ、さらにはあらゆる道路の余地、王都近郊の野原、修道院の裏庭へ辿りつき、そこに木材で仮小屋や仕切りを設けた。震災直後六カ月の間に九千

以上の仮設小屋が構築される。その後なされた小屋の建造や改築は、礼拝用の十字架を二千個も三千個も祀るためもあり、そうした住いに要する日用品の供給と同じく、信じ難いほどの出費と遅滞できぬ多大の労力によって達成された。

【第五五五項】 同じく特筆すべきは、一年余りの期間に千戸以上の住居が再建されたことである。(六千クルザードを多少超える経費であった。)また、近郊にも多数の住居が新築された。この莫大な経費に居住可能な全家屋の修復費を加えると、震災後王都の事業に要した金額は五千クルザード以上と算定される。

【第五五六項】 国王陛下の提議により十一月十一日、総大司教枢機卿陛下は大司教コレジオ、サンタ・マリア大寺院、聖職者団体、各修道会、リスボン市参事会の協力のもとに、同月十六日に恩寵を乞う祈禱行列を(サン・ロケ教会)サンタ・ヨアキム礼拝堂からネセシダーデス教会へ実施すること、また今後毎年十一月の第二日曜日には聖母マリアの加護を願い、晩課の断食を捧げることを指令された。この祈禱行列には国王陛下、王族の方々、宮廷の全員が参加され、きわめて敬虔かつ献身的に営まれた。

【第五五七項】 十二月十三日同じく総大司教枢機卿陛下の指示により、素足の聖職者団体と王都の修道士が、サンタ・ヨアキム礼拝堂における参集と平伏のち、神の慈悲と聖者の加護を懇願して祈禱行列を行った。ラセモニア大司教と総大司教座副司教に先導されて、この行列では総大司教大寺院の高位聖職者二名、王族の貴人、聖堂参事会員があとに続かれ、リスボン市参事員、多くの宮廷貴族や平民も加わって、ネセシダーデス教会まで進んだ。そこではオラトリオ会の神父がローマ教皇大使フィッリペ・アシエウリに補佐されて、巡礼者すべての足を洗った。こうした謙抑な所作や多くの高潔な行為が周囲の人々を感涙させ、リスボン住民の模範ともなった。王都のあらゆる修道会と数多の団体も公私にわたる悔悛を示し、敬虔な祈禱行列を営んだ。多くの全般的告解やさまざまな徳高き行為もなされた。ああ、称讃すべき稀有の御業！

【第五五八項】 つぎにリスボン近郊における大地震の被害について情報を書き留めたい。三百以上の地区から成る王都近郊はすべて建物の被害を受けた。聖ペドロ・ド・バルカレーナ教会の倒壊とともに三名が死亡し、ライス・マゴス・ド・カンポ・グランデ教会、サント・アドリアオ・ダ・ポノバ教会、サン・ジヨアン・バプチスパ・ド・ルミール教会、聖母オリーバエス教会、サント・アン

トニオ・ド・トジャール教会は若干の礼拝堂とともに著しく破壊された。多大の被害を受けた地区は、カンポ・グランデ、ルミアール、サント・アントニオ・ド・トジャール、カルニードである。王都近郊では五十名が死亡した。

【第五九項】 マフラでは強烈な地震と地下の轟音が感知された。世界の驚異のひとつとされる華麗な建築群が揺れ動き、波濤に翻弄される船の如く上下左右に傾いて、視る人々を驚倒させた。各所で相当の被害も生じた。高価な大理石の多くが粉砕され、高樓の燭台が鉄棒で宙吊りとなり、すぐに落下した。南側の角塔は倒壊し、宮殿の穹窿を破壊した。庭園でも二箇所が崩れたものの、とくに被害はなかった。修道院に隣接する地点で足幅ほどの亀裂が見出された。

【第五十項】 村落ではサント・アンドレ教区教会が多大の被害を受けた。ビスコンデ・エ・ポンテ・リマ宮殿と若干の個人の住居が完全に破壊された。その日はレアル会修道士が断食をして、パンや水を摂らなかった。急遽聖体が開陳され、祈祷が続けられた。午後には悔悛の祈祷行列が営まれ、聖職者全員と多くの一般人が悔悛の証しとして跣足の儀式を行った。内では主任司祭アントニオ・ド・サンタ・アンナが厳かに説教した。修道院の僧坊では三つの居室が多大の被害を受けた。

【第五六項】 カスカエスの村落も多大の被害を蒙った。城砦と兵営が破壊された。ふたつの教区教会とともにカプチーヌ会サント・アントニオ修道院およびマリアノス敬虔修道院も大きな損傷を受けた。カスカエスのマルケゼス宮殿も相当の被害を蒙った。

【第五六二項】 シントラの聚落ではイエズス会サン・マルチノ教会が倒壊し、司祭レイムンド・ヘンリク・ミランダと二四人が死亡した。慈悲教会とその僧院も同じ被害を蒙った。マノエル国王によつて造営され、ジョアン五世によつて改装された麗しい兵器庫を別として、シントラの王宮は完全に破壊された。この聚落の周辺ではジェロニモ会修道院、三位一体教会・修道院、イエズス会のサンタ・マリア教会とミゲル教会が完全に破壊された。著名なインド副王ジュアン・ゴ・カストロに設けられた名高いペナベルド農園では、内部の建物と若干の庵室が大きな損傷を受けた。ノートルダム・ド・モンテの低地では高潮の夥しい氾濫が生じた。この聚落では七三名が死亡した。

【第五六三項】 エリセイラでは大半の建物が地震によって破壊された。しかし、教会と礼拝堂に大きな被害はなかった。終日海は怖ろしい高潮となり、数艘の小舟が岸に打ち上げられた。

【第五六四項】 ペニツシユの被害が僅かであり、三名が瓦礫で死亡したのみである。しかし、大山のような海流が押し寄せ、これに浚われるのを怖れた住民が、避難した砂洲で五十人死亡した。

【第五六五項】 リバテジヨのすべての聚落が大きな被害を受けた。アルハンダ、ヴィラ・フランカ、コスタヘイラにおける破壊はそれ以上であった。聖フランシスコ尼僧院では三名の修道女と十四人が死亡した。

【第五六六項】 アランケルも多大の被害を蒙った。サン・フランシスコ教会
Ⅱ 修道院の倒壊では二名の修道女と三名の修練女、そのほか三十人が絶命した。
すべての教会が著しく破壊され、倒壊を免れたのは三十の建物にすぎない。サン・ジェロニモ・ド・マト修道院、近隣の聖パウロ会修道院、カルメル会オルハルボ修道院、カプチン会カヌノタ修道院も甚大な被害を受けた。

【第五六七項】 ポルトガルの重要な聚落であるサンタレムでも地震によって建物に相当な被害を蒙り、大きな危険に曝された。というのは、その地域で広く深い亀裂が生じ、地底の硫化物から硫黄の悪臭が立ち籠めたからである。いずれも高名な聚落の教区教会であるサント・エステヴァオ教会（現在は聖なる天命奇蹟教会として知られる）、サン・マルチノ教会、サン・ジュリアオ教会、サン・ルレンソ教会、救世者教会、サン・ティアゴ教会、サンタ・イリア教会、サンタ・クルス教会も甚しく破壊された。多数の僧院も同じような損傷を受けた。最大の被害はサン・フランシスコ修道院とサンタ・クララ尼僧院であった。慈悲教会と同施設院の破壊も甚大である。個人の住居がとくに瓦解したのは、聚落でもつとも高地に位置する田園マルヴィラである。『博学問答』と題する論述で、高雅にして学殖豊か、と誌された学問所のひとつも地震の被害を蒙った。

【第五六八項】 王国おけるシトー会の中心、初代の国王により壮麗に造られたアルコンバ正統修道院も建物の一部に相当な損傷を受けた。地震が鎮まると、シャクダの沖合から巨大な海流がこの修道院に押し寄せ、聚落の全域に浸水した。折しもシトー会ではマグダレーナ修道院とテルセイラ教団の修道女を伴ってすべ

ての修道女が祈祷行列を営み、参加した告解者の果実に飾られてサン・ブルナルド教会ベルナルチノ神父の説教が行われていた。

【第五六九項】 十一月五日同じく多数の人々を従えてシトー会は、泉の源へ祈祷行列を実施し、全員が天に慈悲を哀願した。セント・ベント教会のルイズ神父が簡潔な説教を行うと、泉が本来の流れに戻り、潤沢に湧き出るのを目にしてみな安堵した。その後数日ほかの神父たちも避難先で説教を続けた。

【第五七十項】 湧き水が修道院に戻ったので、十二月二九日その聚落や近隣の地域から夥しい男女を集めて、シトー会の修道士たちが高名なナザレ神殿で主キリストと聖母マリアに感謝を捧げ、セント・ベント教会のルイズ神父が伝道者の熱誠をもって説教を行った。断食していた修道士全員が、参集した三千人以上にパンを分け与えた。

【第五七一項】 同様に王立修道院の院長、マヌエル・ド・バルボザ神父は壮麗な神殿が神の恩寵によって壊滅を免れるよう、三度の祭礼を行うことを約束され、シトー会全員とその信者が七月の二日、四日、十一日に順次秘蹟教会、ピエダダ聖母教会、サン・ベルナルド教会で厳肅に営まれた。

【第五七二項】 同じく聚落ではセトウヴァールが大きな被害を蒙った。ここでは地震によって神殿、修道院、住居の大半が壊滅した。押し寄せる怒濤も、障壁と建物を数多く破壊した。二艘の大型船をはじめ多くの船が転覆するのに人々は驚倒し、陸地では五百名が海流に攫われた。ボンフィーム・リエス広場では二八の泉が枯渇した。かつまた住宅数戸で火災が発生し、多大の被害を及ぼした。こうした災害の結果、千名以上が死亡したのである。

【第五七三項】 アレンテエジョ地方もエストレマドゥーアに次ぐ罹災を蒙った。テエージュ河流域の全聚落が多大の被害を受けた。パリメラでは教会や建物の塔が崩れ落ち、十四人が死亡した。ヴィコサ聚落では聖母受胎礼拝堂が倒壊し、数多の人々が絶命した。ムーラでは城砦にあるドミニカ会尼僧院が壊滅した。アルカール・ド・サルでもアルセディと呼ばれるフランシスコ会尼僧院が破壊された。ガイド城では教会の本院と多数の建物が壊滅した。この地方の都エボラでは多くの大建造物に相当の被害が生じたものの、死者は一名に止まった。

【第五七四項】 エストレナドウラ地方に近接するベイラ地方も地震の被害を蒙った。この地方の都コインブラでは多くの建物が破壊されたものの、幸い死者はなかった。サン・ドミンゴ古修道院の穹窿が瓦解し、人々は危険を感じて避難した。イエズス会教会の主要正面を飾るふたつの天蓋、イエズス会・サン・ジエロニモ修道院に属する教会の穹窿柱石、サン・フランシスコ修道院の突塔も同じように倒壊し、多くの人々を慄然とさせたが、危害はなかった。

【第五七五項】 サン・パウロ王立イエズス会修道院の正面をなす円形の柱石、イエズス会サン・ペドロ・クルズ修道院の主要正面、サンタ・クララ修道院の装飾、サンタ・クルズ修道院のさまざまな彫像と突塔が倒壊した。ポルトガルにおけるもつとも壮麗な突塔のひとつも、三つの穹窿と三つの僧房もろとも壊滅し、住民を大きな危険に突き落した。築城の礎石もいくつか崩れ、城内の聖器保管室でも天井が損傷した。大学のきわめて壮麗な大広間、当地の重要で独自の建築も多大の被害を受け、全壊の危険を防ぐため、すぐさま補強が行われた。

【第五七六項】 地震が激しかったので、幾度も鐘が鳴るのを聞いた。海洋が揺れ動いたかと思うと、モンデゴの波濤が狂い立った。この日の午後ポルトガル区域の聖フランシスコ会修道士とイエズス会聖パウロ修道士、コンデ司教と聖堂参事会員、大学の学長・教授・博士による成る祈禱行列が予定されていた。偉大な高位聖職者の模範的な徳操を見倣うよう、素足となり、贖罪を願って、あらゆる宗派の人々が行列を繰り返したのである。修道会に属する聖堂参事会員も九日間夜通し鐘楼で素足となり、聖器の前で殉教者への祈禱を捧げた。ほかの教会でも同じような儀式がなされるとともに、遍く市中で禁欲が説かれ、それによって生活の大いなる改善と数々の美德の発露、とくに愛徳の実践が行われた。

【第五七七項】 ミーニョ地方およびトラズ・オス・モンテス地方では恐怖を感じたものの、さして被害を受けなかった。震動はポルトガルの全土で感知されたが、これらの地方では比較的軽度であった。

【第五七八項】 アルガルベ国では他の地域と同じく沿岸部で震動が激しく、多大の被害を蒙った。

【第五七九項】 同国の都ファローでは大聖堂教会、エピスコパル宮殿、壮麗なサン・ペドロ教会、イエズス会パドロ教会、カプチン会尼僧院、修道士庵院が

倒壊した。教会や住居で破壊を免れたものは結局ひとつもない。この司教区の大司教は居室の崩壊から救い出され、全市にわたり熱烈に説教するとともに、高位聖職者の敬虔で周到な行為を数々実践された。

【第五十八項】 都市ラゴスでは知事公舎の宮殿は唯一破壊を免れたが、ほかの建物にいたロドリゴ・アントニオ・ノロンハの子息と現知事のメニゼスは死亡した。カルメル会修道院は完全に倒壊し、多数の修道士がそこで歿した。

【第五八一項】 都市セルヴァでは大聖堂、鐘楼、城砦、市壁、市会議所、聖フランシスコ第三修道院が壊滅し、瓦礫に埋れる道路で多数の人々が死んだ。

【第五八二項】 ノヴァ・ド・ポルチマオの聚落では、イエスズ会の壮麗な教堂、さらには聖霊教会を除くすべての教会が倒壊した。

【第五八三項】 ルーレの聚落では多数の建物が壊滅し、一五〇人以上が死亡した。ラゴアではマルトリツ教会とほぼすべての家屋が破壊された。新築まもないカルモ修道院も全壊し、修道士一名と一般人数名が犠牲となった。建物の瓦礫によって多数の人々が死亡した。結論的に言えば、この国で大きな被害を免れた都市や村落はひとつもない。

【第五八四項】 コスタの海洋が通常の水面より数バラ（訳注*）隆起して、多数の地点で氾濫し、退き際にもいくつかの門口の壊したあと、アルブフェイラの町中に大量の魚を置き去りにした。

*バラは一・一メートルに相当する。

【第五八五項】 スペインについてはエステリオ海岸に近い地域で比較的大きな被害があった。マドリッドでは十時十八分に震動が感知された。すべての住民を慄然とさせ、八分間続いたのである。王都の建物のうちプラド^{II}カプチン会サント・アントニオ教会とビエン・シュセソ聖母教会の正面を飾る二つの十字架が崩れ落ちた。

【第五八六項】 セヴィリアでは寺院と建物が多大の被害を蒙った。八人が死亡した。『リスボン報知』一七五五年第四六号で伝えられたが、甚大な被災であるものの、正確な情報に欠けている。フェルバは寺院と家屋が一層大きな被害

を受けた。カディス、サンタ・マリア・エル・プエルト、サン・ルカール、エグゼレス、ポルト・レール、アルジェシラス、アヤモント、アlicant、およびコルドバでは強い震動が発生し、相当の災厄となった。グラナダでも強い揺れを感じ、スペイン王国の港湾マラガも多大の被害を受けた。ジブラルタルやスペイン海岸の他の地域もきわめて強烈な震動に襲われ、ポルトに近い山岳でも山崩れが見られた。

【第五八七項】 フランスではラ・ロッシェル、ボルドー、その他沿岸部で地震が感知された。アングレームの近くで轟音とともに大地の亀裂が生じてその割れ目から赤水の奔流が噴出し、タンギール近郊の水源でも同じ現象が惹き起された。

【第五八八項】 ベルン、バーゼル、その他スイス各地でも同じように震動が感知された。(もっとも強い揺れに襲われたのはバーゼルである。)アウグスブルグ、ストラスブル、さらにはロンバルディアなどイタリア各地でもこの地震が感じられた。

【第五八九項】 ハーグ、アムステルダム、そのほかオランダ各地では十一時半に運河や水路の攪乱が見られたけれども、建物の揺れはなかった。

【第五九〇項】 ベルリンから十二レガ、バルチック海から三〇レガ離れた都市テムプリンでは十一時と正午の間にネッツオ湖、ムフルガスト湖、ロデリン湖、リツベセの湖が、突然轟音とともに著しく増水して沿岸の地域に氾濫し、数分後急速に退いた。この氾濫と退き水は半時間のうちに六度繰り返され、耐え難い悪臭が大気に発散した。

【第五九一項】 湖水の氾濫はデンマークのダレレカリア地方とヴェルメランド地方やノールウェイ王国においても観察された。スウェーデンとポレマニアでも同じような影響があった。テオプリッツをはじめボヘミアの各地では流水が変色して溢れ、いくつかの温泉でも赤水が流れた。イギリスの沿岸部とおなじくアイルランドの若干の地域でも海水の攪乱が観察された。

【第五九二項】 アソーレス諸島においては繰り返し地震を感知したが、被害はなかった。海は再三激しい退き潮となり、テルセエイラ島で多数の船舶が難破

の危険に曝された。

【第五九三項】 アフリカでは地中海沿岸の聚落が多額の被害を受けた。聚落メキネズが全滅して、回教寺院やユダヤ教会や住宅が多数倒壊し、沢山のムーア人とユダヤ人が死亡した。サン・ディオゴ教区のフランシスコ会修道院・教会・施療院も酷く破壊されたが、キリスト教徒の死者はなかった。

【第五九四項】 フェズ、マロツク、サレなどの都市、サン・フェ、サン・クルスなど港も同じように破壊された。これらの港やサレでは海流が数里離れた内陸まで押し寄せ、多大の被害を与えた。こうした災厄によつて数千人の生命が奪われたのである。

【第五九五項】 同じ事態がアルジェリア、ララツシュ、マルモア、タンギールでも発生し、海流が大きな災害を惹き起した。スウタとテスアンでは比較的被害はすくないものの、多くの建物が破壊された。

【第五九六項】 メキネズからやや遠方にある八つの湖で陥没が生じて、ひとつの村落が沈没し、兵舎にいた騎兵六千人とすべての住民が犠牲になったと伝えられる。また、サレからモロツコに向かう一群の隊商も同じ運命に陥つたと言われる。ペイゼスでは地底から凄まじい洞音が響いた。

【第五九七項】 アメリカでもこの地震の余波を受けた。バルバダス諸島では二時間後の一時頃海面が低くなつたあと、突然波濤が五フィートの高さとなり、激しくまた沈下した。こうした波濤の起伏は十五分にわたり、五時以降弱まったものの、宵の十時まで続いた。アンチゴアでも海流の攪乱が確認された。また、ニュー・イングランドでも震動が感知された。

【第五九八項】 ついで十一月一日以降の地震の所産と影響について要約するが、類似する多くの出来事に関し副次的な問題には立ち入らない。

【第五九九項】 地震直後の二四時間には大地がほとんど間断なく震動を続け、毎時間感知された。多くの人々がまたも揺れたと思ひ、最初の地震の恐怖から発する幻の震動と疑う者もいたが、スペインでもやはり揺れが認められた。私の観察によれば、こうした震動は最初の三日間ほとんど間断なく続き、屋内でも確

かに感知されたが、当初のように強烈にはならなかった。十一月一日以降の八日間つねに震動は反復し、やや強いときもあつたが、微弱なものは感じない人もあつた。

【第六〇〇項】 十一月八日の朝八時半に大地が激しく揺れた。この震動はポルトガル海岸の沖合六十リガでもイギリス船において感知された。

【第六〇一項】 同月十五日朝五時に大きな震動があつた。万聖節に地震を感じたグラナダ各地でこの揺れが発生した。

【第六〇二項】 同月十六日午後三時半過ぎに大きな爆発が起つた。コンポステラとラ・コルーニャを揺がして、若干の被害と海流の攪乱を惹き起した。

【第六〇三項】 同月十七日フランスのブザンソンとリヨンでの震動が認められたが、とくに被害はなかつた。イギリスでも同じく感知された。

【第六〇四項】 同月十八日北米のボストン、フィラデルフィア、メリーランド海岸で震動が認められた。これはポルトガルでも感知された。十一月の末パードル・カブレラにおいて終日震動があり、十二月にかけて一カ月揺れ続けた。

【第六〇五項】 十二月九日大きな地震があり、スペインを越えてフランスのラングドック、プロヴァンス、デルシナド、ボルゴンハ、アルザスでも感知された。また、フランソニア、スアヴィア、スイス諸州、ミラノでも認められた。

【第六〇六項】 同月十一日バイエルン地方、とくにドナヴェルトやインゴルシュタットなどの都市で大地の揺れが認められた。ポルトガルでも午前五時頃二度にわたり非常に強い震動を感じた。スペインでも強く揺れ、ほぼ三分間続いた。

【第六〇七項】 同月十八日ヴィトシャヴェンなどイギリス各地で強い震動が感知された。

【第六〇八項】 同月二一日午後九時頃非常に強い地震があり、リスボンとその近郊で若干の被害が生じた。さらにながく続けば、まさしく大惨事に至つたと思われる。

【第六〇九項】 同月二五日午前二時頃リスボンなどポルトガル各地で震動を感じた。

【第六一〇項】 同月二七日きわめて強い地震が発生し、テオンヴィルでは兵舎が倒壊し、五百人が瓦礫のもとで絶命した。エクス・ラ・シャペル、コロニア、ブリュッセル、オランダ各地へも拡大した。システロン近くのデルフィナドでは対峙する山岳が崩壊し、谷間の川は湖に一変した。モベージュに隣接するフランドルでは大地が陥没して、大きな洞穴が生じた。

【第六一一項】 同月夜半の一時と二時の間にスコットランド入植地で幾度か大地が大きく揺れたが、被害はなかった。

【第六一二項】 一七五六年一月に多くの震動があつたけれども、これらは記帳には見出せず、覚えてもない。なぜなら、とくに記帳を始めたのは、同年四月二五日の大地震からである。

【第六一三項】 二月十二日午前五時から午後九時にかけてモンテギル山で大砲のような轟音が発し、大地が幾度か揺れた。その轟音は五日前にも聞こえ、人々を驚愕させたのである。同じ十二日コネテ・エル・レアルで昨年十一月一日に生じた隆起がこのときもとに戻つた。

【第六一四項】 同年二月十八日の地震は前年十一月一日以後では最大であつた。七時から八時にかけてネーデルランド全域で感知された。ケルンとボンでは八時に、ついで九時前にも数分続く地震が発生した。これらの都市では最初の震動で多くの煙突が倒壊した。井戸や泉では水の攪乱も見られた。同じ地震はパリやヴェルサイユなどフランス各地でも感知された。おりしも雨期にあたり、暖かな西風を受けていた。地底からの轟音も一分以上続いた。リエージュでは揺れが一層ながく持続した。デンマーク、スウェーデン、ノールウェイでも弱震が感じられた。

【第六一五項】 二月二四日アキスグラン、ビスポドス・デ・ムンステル、パデルボルンで地震が発生し、きわめて激しく多くの被害を与えた。同月末にヴァレシオス国で地震があり、多数の住居が破壊された。

【第六一六項】 三月にヴェスビアス火山で煙と炎の噴出が始まり、四月まで続いて溶けた瀝青岩の奔流を惹き起した。近寄って調べようとした外国人三名が死亡し、連れの同国人も動転して、彼らを救助できなかつた。

【第六一七項】 四月十三日朝ヴェネチアで地震が感知されて数分間続き、三時間後にもふたたび揺れたが、被害はなかつた。

【第六一八項】 同月一八日より大きな地震がパドヴァ、ヴェローナ、トレヴィーゾで発生し、強い衝撃によつて多くの煙突、サンタ・マルガレータ教会の穹窿、司教神学校の一角が倒壊して、住民を戦慄させた。翌日の夜にもかなり強い震動が感じられた。その際南西から北西へ揺れるに向うと観察された。

【第六一九項】 同月二四日二時十五分頃ポルトガルで地震が発生した。当日以降試みにすべてを私は記帳した。

【第六二十項】 同月二五日午前三時曇天にして、ときに風雨もあつた。

【第六二一項】 同月二六日午前五時半に大きな震動が発生したけれども、ながくは続かなかつた。曇天であつた。フランス、プレシス、サン・ジユストでは二度弱い振動が感じられた。

【第六二二項】 同月二七日午前三時と午後九時の二度にわたり震動が発生し、曇天であつた。

【第六二三項】 同月三十日午前五時頃に弱い揺れであつたが、ながく続いた。曇天であつた。午後九時十五分にパリ、ヴェルサイユ、ピカルディ地方で地震が感知され、同時に森林を突き抜ける強風に似た轟音が地下から聞えた。また、プレシスの城砦では石造りの煙突が倒壊した。

【第六二四項】 五月三日午前一時に地震が発生した。その日は雨天で、前日に幾度か雷鳴が聞えた。

【第六二五項】 同月四日夜半過ぎに弱い揺れがあつた。

同月五日午前四時半に弱い地震が感知された。

【第六二六項】 六月二日ブリュッセルでふたつの地震が感知された。第一は午後十時に、第二は夜半により強く揺れた。これらはリエージュ地方やレンブルゴでより強く、ライン沿岸の多くの都市でも感じられた。ケルンでが二分以上揺れ続けた。

【第六二七項】 七月三日リスボンで十一月一日の地震に次ぐ大きな揺れが発生した。午後十時半地下の轟音が十秒か十二秒遠くの太鼓のように聞えて、最初の震動は王国のほとんど全土で感知された。これに先立って当日午後蒸気が王都を覆った。地震後まもなく海上に濃霧だ立ち籠め、しばらく南から微風がそよいだ。深夜一時にも新たな地震があった。

【第六二八項】 八月五日午後弱い振動があった。

【第六二九項】 同月十七日天気晴朗なパドヴァが午前十時半頃暗い雲に覆られ、嵐に襲われて、多大の被害を受けた。その後三度大地が激しく揺れ、建物の破壊と住民の死亡を惹き起した。当日および翌日に他で地震が発生したことが記録されている。それらの被害はリスボンへ誇張して伝えられ、しばしばあるように現場の状況とはやや異なっていた。

【第六三十項】 同月二十日午前六時四五分頃弱くはあるが、ややながい震動が発生した。

【第六三一項】 同月二六日午前七時四五分頃比較的強い地震がややながく、ところによって一分以上続いた。私自身が感じたのは二十秒ほどである。

【第六三二項】 九月十二日午後八時頃短い揺れがあった。

【第六三三項】 同月十七日深夜二時十五分頃弱い地震があった。

【第六三四項】 十月二二日午後二時半静穏な天候のナポリを突然きわめて激しい地震が襲い、三〇秒以上続いて多くの建物に甚大な被害を与えた。海洋にも著しい攪乱が見られた。これに先立ち八月十五日以降ヴェスヴィアス火山の噴火

があつた。この十月コンスタンチノープルでも数度地震が発生し、若干の被害を蒙つた。

【第六三五項】 同月二九日深夜一時半頃強い地震があり、十秒続いた。

【第六三六項】 十一月十九日午前零時四五分頃弱い揺れがあつた。そのとき空は雲に覆われ、南から強い風を受けた。

【第六三七項】 同月二六日午前十一時四五分頃コンスタンチノープルで大きな地震が発生して七分間続き、これにより五千の住居、五十の殿閣、五つ回教寺院が全壊し、さらに多数の建造物は破壊された。死者は八千人以上である。これに続いて火災が拡がり、鎮火できないため全市が灰塵に帰すのではないかと憂慮された。

【第六三八項】 十二月にも小さな地震が数度感知された。

【第六三九項】 一月十六日激しい風雨のち静穏な夜になつた頃、午前二時に強烈な地震が発生した。ながくは続かなかつたが、震動に三分か四分先立ち、地下の轟音が聞こえた。

【第六四十項】 一七五七年には地震がより微弱でより少数になつたことを、まず書き伝えたい。

三月一日午前一時頃発生した地震は他の多くと異なり、ふたつの衝撃ないし強烈な震動となつてしばらく続いた。同じく五月二一日十一時十五分頃感知された地震は広い範囲にわたる。毎月数度揺れを感じたが、比較的微弱であつた。九月と十月リスボンでは地震が感知されず、記帳も十月二十日で終っている。しかし、アレンテージョではこの間、とくに十月十日午後六時半に強烈な地震が発生し、午後十時にも一層弱い揺れが感じられた。他の確かな報告によれば、同日この地方では十二回地震が感知された。

【第六四一項】 謎めいた話であるが、同日リスボンのアルカントラ河岸では、第三身分統合裁判所の構築による仮設小屋で一度だけ一時頃地震が感知された。この現象をどう理解すべきかは別の機会に論じよう。私たちにみずから体験させ、人心に痛切な記憶を刻み込んだ大地震の影響はなお尽きないが、いまだ論

じないほかの要因についてさらに記述しよう。

二〇二二年十二月二十四日初出

二〇二四年十二月十九日補正